

2021.10.30

兵庫県姫路市

第 72 回WHO西太平洋地域委員会関連イベント

WKC フォーラム 2021

Global Health High School Summit

姫路高校生宣言

私たちは、世界に影響を与えるために集まりました。

新型コロナウイルス感染症は、私たちの生活を大きく変えました。高校では登校制限が実施され、家の中で授業を受ける日々が続きました。同級生との初対面は画面越し、憧れていた文化祭も修学旅行も中止もしくは延期され、想像していた高校生活とは全く違うものになりました。しかし、この困難な時代に高校生活を送った私たちだからこそ、未来の未知なる感染症と戦うために考え、発信することはできないのでしょうか。コロナ禍を生きることのできた経験を、アイデアに変えていくことができるはずです。同世代を生きる人々、そして次世代の未来を生きる人々に、この宣言を発表します。

私たちは、今回のサミットに向けて、コロナ禍における学校での健康課題について学びました。コロナ禍でストレスが高まり、精神的に追いつめられている学生がいること。悩みを抱えた学生が、相談できる場所に助けを求められずにいること。手指消毒の重要性は理解していても、適切に実施できていない高校生が多いこと。部活動や委員会活動における個別の感染対策が示されていないこと。ウイルスやワクチン接種についての、信憑性の高い情報を得る機会が少ないこと。コロナ禍で学校に行けないことで、食費等の家庭負担が増加し、子どもの貧困問題が悪化していること。

これら様々な課題に対して、私たちができることを考え、行動しました。

SNS を活用し、ストレスに対して、友人同士で相談をしたり、感情を共有したりするためのポイントをまとめた学校ガイドラインを作成しました。毎日の体調チェックにメンタルヘルスの項目を追加して、不調がある人が保健室に相談しやすい仕組みを考案しました。各部活動の部長を集めた対策会議を発足し、各部活動での個別の感染対策ガイドラインを作成し、学校での感染対策を強化しました。学校内で消毒液が設置されている場所を調べ、消毒をしたくなるような仕掛けを設置し、手指衛生の啓発キャンペーンを行いました。新型コロナウイルス関連の情報と正しく向き合うために、アンケートによる情報リテラシーの実態調査を行い、情報の真偽を見極めるためのモデル授業を実施しました。相対的貧困にある子どもを支援するためのフードバンクなどの地域資源をまとめ、コロナ禍におけるより良い家庭環境について提案しました。

行動を起こした私たちだからこそ、世界の人々に伝えたいことがあります。

地域に住む私たち一人一人が、感染対策の主役です。皆で力を合わせれば、感染症を乗り越え、笑顔で溢れた新しい日常が来ると私たちは信じています。そんな未来と一緒につくっていきませんか？

みなさん。

世界は今、パンデミックという未曾有の危機の中にあります。遠くない未来、再び人類が同様の危機に晒されることは、このグローバル社会において想像に難くないでしょう。今を生きる私たちには社会の一員として、感染症対策、健康危機管理に取り組む責任があります。そしてこの大きな問題に対して、少しずつでも前に進んでいかなければなりません。

感染症対策において大切なこと。それは、まずは自分の命を守ること、そして周りの人を思いやる気持ちを持つこと。勇気を出して、一步を踏み出し、行動することが、大事だと私たちは学びました。命を守るために、今私たち高校生にできることがたくさんあります。困ったときは先生や友人と協力し、支え合うこと。正しい情報を見極め、それを周りに正しく伝えること。また、学校や地域に、私たちの命を守るための資源があることも知りました。私たち自身や周囲の健康に関心を持ち、辛いときには助けを求め、互いに助け合える優しい雰囲気を作っていくこと。これら全てが、かけがえのない命を守ることに繋がります。

このサミットを通じ、私たちが次世代の担い手であることを自覚し、今後も努力を重ね、責任を持って人類の健康危機に取り組んでいくことをここに宣言します。

学校と生徒のメンタルヘルス

<問題認識>

現在、新型コロナウイルスの影響で特にストレスフルな環境下にあり、心の病気にかかる人が増えてきています。その影響で自殺をしたり、不登校になったりする学生もあり、取り組むべき課題だと考えています。コロナ禍以前は感動や喜びをシェアし、心の内に抱える悩みや不安も打ち明け、他人と良好なコミュニケーションを取ること、それを乗り越えることができていました。しかし現在は対面でのコミュニケーションが一部制限されているため、そのような人間関係の構築が難しくなっていると感じています。

<私たちができること>

私たちに出来ることは、SNS でたった一文でも友達にその日の出来事を共有することです。私たち 10 代は SNS を利用することで、コロナ禍でソーシャルディスタンスが求められる中でも、人々とつながることができます。SNS で感動や喜びをシェアし、友達と良好なコミュニケーションをとることで、ストレスフルなコロナ禍を乗り越えることができます。またクラスや学校でガイドラインを作り、SNS の積極的利用を呼びかけることで、生徒に行動変容を促すことができます。SNSトラブルが起きないように、適切な SNS 利用を呼びかけることも大切です。

<世界の人々へ>

コロナ禍で人との交流が以前よりも減ってしまった現在、不安や悩みを打ち明けることがより難しくなっています。しかし SNS で感動や喜び、悩みや不安を共有することで、より良い人間関係ができます。そうすることでストレスに適應する能力が上がり、メンタルヘルス改善につながります。そしてこれが成功体験となり、また感情を共有したくなる、というように正の連鎖にはまると考えています。もしコロナ禍で人々と交流できないことに悩んでいるのであれば、積極的に SNS を用いて、自身の心の内を他人に伝えましょう。

<問題認識>

新型コロナウイルスが猛威を奮っている現在、感染者数・死亡者数とともに大きく注目されているのが「メンタルヘルス」の問題です。メンタルに不調をきたす人が増えていますが、学生も例外ではありません。実際に日本では 2020 年度に小中高生の自殺者数が過去最多となりました。また日本だけでなく世界各国でもうつ症状を示す学生が増えているのが現状です。しかし、「メンタルヘルスに対して偏見がある」ことで周りの目が気になり、スクールカウンセラーや保健室など学校に助けを求められない学生が多くいることに問題があると言えます。

<私たちができること>

メンタルヘルスを守るために私たちに出来ることとして、毎日のメンタルヘルスチェックとInstagramでの情報発信があります。メンタルヘルスチェックを用いて毎日の精神の健康状態をチェックすることでいち早く SOS に気付けるようにします。Instagramではメンタルヘルスの正しい知識を伝え、保健室の先生やスクールカウンセラーの先生を身近に感じてもらうために、彼ら彼女らに関する情報を発信します。これらのことで学校での生徒のメンタルヘルスを守りやすくなり、うつ状態の高校生が減ります。

<世界の人々へ>

感染対策と比べメンタルヘルス対策は忘れられやすく、かつ、個人レベルの対策が明確になっていないため、やるべきことがわからない方が多いと思います。自分のメンタルヘルスを保つには、自ら助けを求めに行くことが大切です。大人に相談できる場所は学校のカウンセラーや保健室、電話窓口などに用意されています。それらの存在を知らせたり相談しやすい環境を作ったりすることが、高校生である私たちにできる最も重要なメンタルヘルス対策だと思います。世界の皆さんのメンタルヘルスがより向上することを願っています。

学校での COVID-19 対策

< 問題認識 >

新型コロナウイルスの脅威が蔓延しており、感染対策は高校生たちも例外なく迫られています。明らかな事実として、手洗い・手指消毒は新型コロナウイルス感染対策として有効です。しかし、私たちが通う学校の生徒は手指消毒に対して適切な方法で必要な回数できていない生徒もいます。高校生は具体的な知識はある程度持っていると言えますが、消毒を習慣化するという段階までは至っていない生徒も見受けられます。今こそ必要であるのは、厳密で専門的な知識の普及啓発ではなく、シンプルで科学的に正しい方針に基づいた感染対策と行動変容と考えます。

< 私たちができること >

私たちができることは、多くの人が利用する学校の環境をさらに改善することです。まずアルコール消毒装置の設置場所を書き留め、相対的に手指衛生が保たれない場所を可視化し、設置数が少ない場所に対しては学校側に適切な設置数を独自に定めて新たに設置をお願いします。また、多くの生徒が利用する場所では消毒装置に誰でも複製可能な仕掛けを考案し、手指消毒を促す取り組みを行います。その消毒液の設置前後で効果測定を行い、本当に正しい対策が講じられているか吟味し次のアクションを考えることです。

< 世界の人々へ >

普段慣れ親しんだ学校でも、相対的に消毒が行えていないリスクのある場所は意識して調査することで初めて発見することができます。手指消毒に対するみんなの取り組みや行動を変えることは簡単ではありませんが、効果的な策を講じることで確実に行動変容を促し、学校全体の感染対策レベルを上げることが可能です。効果的な策は、創意工夫と熱意を持ってすればたくさんお金をかけたりする必要はなく誰でも行うことができます。自分 1 人の力ではなく、学校の先生や友達に熱意を伝え協力しながら進めていくことが何よりも大切な姿勢です。

< 問題認識 >

若者の感染率が高い変異株の流行により、高校生の部活動におけるクラスター発生率が高くなってきています。また、部活動のコロナ対策ガイドラインについては、対策の具体性がなく、各市町村でその内容にも差があります。そして、学校によって部活動の種類や活動場所の環境も異なるため、すべき対策にも違いがあります。よって、どの学校でも実施可能なコロナ対策ガイドラインを作ることは難しいのが現状です。

< 私たちができること >

各部活動でのコロナ対策の現状を把握するためにアンケートをとります。その結果と活動場所や運動量により各部活動をチーム分けします。部長を集め、計 3 回の会議を行います。1 回目の会議では、現在行っているコロナ対策と危険だと思う場所・状況についてディスカッションしてもらいます。2 回目は、必要な対策や注意点をチーム内で共有し、対策を実行するための具体案を出してもらいます。3 回目は、これまでの会議を参考に作成したガイドラインを配布し各部活動で実施するように呼びかけます。

< 世界の人々へ >

私たちは今回、ガイドラインを作る中で現状の問題点を把握し、自分たちにできることを考えることができました。学校生活において放課後や休み時間など、生徒が自主的に活動する時間では、その活動を実際に行っている人にしか分からないことが多くあります。だからこそ当事者たちで意見を出し合い、議論することがよりよい感染対策を実行するには重要です。会社や学校、クラブ、家庭など、立場によってできる感染対策や必要な感染対策は変わるので、意見を出し合い議論してそれぞれに適した感染対策を考えることが必要です。

若年層のヘルス・コミュニケーション

<問題認識>

現在、私達の身の回りには新型コロナウイルス感染症に関する情報が溢れており、その情報は正しい情報と誤った情報が入り混じっています。しかし、私達高校生がその情報を受け取る時に情報の真偽を正確に判断出来ているとは言い切れません。どの情報が自分自身の健康を守る正しい情報なのかを判断できなければ、科学的根拠に基づかないデマ情報に惑わされ、結果として自分達の健康を害する事になりかねません。Infodemic に直面している今だからこそ、身の回りに溢れる情報に正しく向き合うために、情報リテラシーを高め定着させていく事が重要です。

<私たちが出来ること>

まずは高校生の情報の入手先、そして受け取った真偽のわからない情報にどのように対処しているのかを調査します。その結果を受け、正しい情報を見極めるための授業を実施します。授業はクイズ形式を導入し検索時間を設ける事で、情報を鵜呑みにする事なく疑い、正しい情報元にアクセスし、常に知識をアップデートする重要性を実際に体感出来ます。さらにステッカーの配布を通して、授業外での継続的な啓発活動を行う事で授業内容の定着を図ります。そして葺合モデルを詳細に公開し、全国の高校に実施を促進することで Infodemic に立ち向かいます。

<世界の人々へ>

インターネット上の情報は国籍や人種を超えて世界中から物理的距離は関係なく、誰でもアクセスできます。しかし、これらの情報は現在のパンデミック下において良くも悪くも人々の行動選択に大きく影響します。感染症に対する過度な恐れや好奇心は、時に誤情報の拡散に繋がります。そのため、ひとりひとりが自分の発信する情報が誰かの人生を左右する可能性があることを自覚し、責任をもって発信する事が重要です。そして、自分の手元にある情報を鵜呑みにせず、必ず真偽を確かめ、正しい健康行動を取ることで自分自身や大切な人を守りましょう。

<問題認識>

私たち高校生は、受動的に情報を受け取っています。SNS や友人伝いなどで、個人的な意見かつ情報源のはっきりしないものを目にすることは多いです。新型コロナウイルスやワクチンに関する玉石混淆の情報にあふれ、デマ情報をデマだと判断できず信じてしまう人も出てきています。そのために必要な情報を持った上で納得のある行動判断ができていない人が多いと思われます。この状況を変えるために、国や厚生労働省などの公式のサイトなどを利用し、情報を比較して、正しい情報を能動的に得る姿勢が大切だと認識する必要があると考えます。

<私たちができること>

私たちは高校生が新型コロナウイルスに関する情報の捉え方を再確認できる機会を作るべく、校内での放送・ポスター掲示を行いました。昼の校内放送ではワクチンに関する情報の真偽や接種のメリットについて伝えました。また視覚的な反復効果のあるポスター掲示ではワクチンに関する Q&A や Infodemic の情報を掲載しました。どちらも情報の内容だけではなく参考元を伝えることで、信頼できる情報源についても知ってもらうことを意識して作成しました。このようなアクションは高校生の主要な情報ソースである学校で行うことで有効であると考えます。

<世界の人々へ>

私たちはコロナ禍を通して、多くのことを見直すべきであるとわかりました。その中でも特に、情報との向き合い方は情報社会に生きる私たちだからこそ、今一度顧みる必要があると考えます。SNS は誰もが情報を発信できる場であり、出会う情報がすべて正しいというわけではないということを理解し、信用できる機関の情報を自らが積極的に入手していくべきです。私たちはこれからも個人の判断での行動が求められます。世界中の人々が協力しなければいけない状況下で、正しい情報に基づく個人個人の慎重な判断、行動が大切になってくると考えます。

コロナ禍による貧困や家庭環境の悪化

<問題認識>

コロナ禍でステイホームが要請される社会情勢の中で、「子どもの貧困」が深刻化しています。休校中、給食が休止したために栄養が偏ってしまった子どもや、学童保育がなくなって家にいる時間が増えたうえに、家計の切迫により塾に行けず、教育の機会を失う子どもが急増しました。ところが、子どもたちには貧困の自覚がなかったり、まわりに知られたくないという貧困に対する抵抗感から、自分からは声を上げられない場合が多いのです。私たちは、貧困にある子どもたちを地域の支援につなげることが何よりも大切であると考えます。

<私たちができること>

私たちにできることは、地域と子どもたちの間にある距離を縮めることです。まずは子どもたちに、フードバンクやこども食堂など、地域にはさまざまな支援体制があることを知ってもらうために、わかりやすくまとめた動画を作成します。そして支援の必要な子どもたちがSOSを出せるようにするために、相対的貧困について知ってもらい、もしかしたら自分も貧困状態にあるのではないか、支援を受けることができればもっとやりたいことができるのではないか、という気づきを得る機会を作ります。

<世界の人々へ>

「貧困」はひとりで抜け出すことは難しく、また、親から子へ連鎖していきます。この連鎖を断ち切るためには、まずは子どもたちが貧困について知ることが必要です。そして、支援の必要な子どもたちがより多くの支援につながるができるように、地域全体で動いていくことが大切です。SDGsが掲げる「誰ひとり取り残さない未来」のために、コロナによって深刻化した「子どもの貧困」の悪循環をここで逆循環に変え、幸せの輪を広げていけるように、姫路から日本へ、そして世界へと、ひとりひとりがその輪の一部になっていきましょう。